

藤原宮第16次（南）の調査

（昭和50年1月～昭和50年3月）

調査地は『概報5』で報告した第16次（北）地区に南接する水田で、北地区の調査に引続いて調査を実施した。調査区の南東が、大極殿院を構成する西脇殿に近接するため、これに接する範囲までを調査対象とした。

検出した主な遺構には、北地区でその一部を検出している建物SB1751・道路SF1832の南延長部分の他に、掘立柱建物・柵・井戸・土壙・溝などがある。これらは藤原宮造営以前（A期）・藤原宮期（B期）およびそれ以後のものに分かれる。

藤原宮期（B期）の遺構には掘立柱建物SB1751・柵SA1825がある。SB1751は北地区で桁行3間分を検出していた建物で、梁行2間（6.4m）・桁行7間（22.4m）の南北棟である事が判明した。SB1751は南北道路SF1832を廃し側溝を埋めたのちに建てられている。柱穴は一辺約1.4mの方形ですべてに柱抜取痕跡がある。この建物は、調査区内を西南から東北に走る砂層の上に建てられているため、柱掘形の底には円礫や瓦片を敷いて不等沈下に備えている。



SB1751（南から）

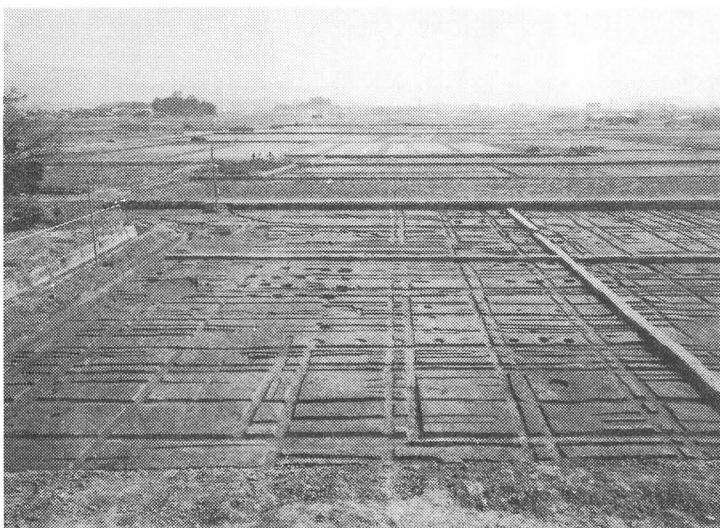
なお、底に敷く瓦として軒平瓦6647Aを用いたものがある。柱間は桁行梁行共3.2m（11尺）等間に割りつけている。建物の西側柱列は内裏西外郭柵から東11.8m（40尺）の位置にある。SA1825はSB1751の東3.8m（13尺）にこれと平行して建てられた7間（23.6m）の南北柵である。柱間は2.8m～4.0mと一定でなく、特に南北の両端間が広くつくられる。SB1751の目隠し塀であろう。大極殿院西回廊と内裏西外郭柵とで狭まれた部分の北半部におけるB期の遺構はこれのみ

であり、この部分の大半は空間地とされていたことを確認した。大極殿回廊や西脇殿に関する遺構は存在しなかったが、それらの廃棄に関わる遺構として土壙 SK1782・1792 を検出した。これらは凝灰岩片と藤原宮の瓦を含む不整形な土壙で、瓦に完形に近いものが多い。丸瓦・平瓦の他に軒丸瓦 6281A・軒平瓦 6641F 各 1 点が出土している。

(A 期) の遺構には南北道路 SF1832 の他、掘立柱建物 16・柵 4・井戸 2 がある。SF1832 は北調査区で東西道路 SF1831 と交差しており、今回はその南延長部分で都合 65m 分を検出した事になる。道路は藤原京条坊地割に一致する。その両側溝埋土には 7 世紀後半の土器類が含まれるが瓦の出土を見ない。これは第16次北調査や第 5 ~ 9 次調査における所見と同様である。

SF1832 の東で多数検出した小規模な掘立柱建物は軸線の方位に多様性があり、N 15°W から N 5°E の範囲にわたるが、これらはおよそ、西に偏するもの。方眼北に近いもの、東に偏するものに大別され、その中の細分を含めて 5 類に分けられる。

I 類は方眼北に近いもので、SB1775・1785・1816・1822・SA1789・1813 がある。SB1775 は桁行 3 間以上の東西棟で柱間は 2.1 m 等間である。西妻柱穴が検出されず、梁行が 4.6 m と広くなる事から、建物と柵とに分離される可能



第16次(南)調査地全景(北から)

性もあるが、東・南方が調査区外になるため不明である。SB1785 は 2 間 (4.0 m) × 2 間 (3.0 m) の南北棟である。SB1816 は 2 間 (3.0 m) × 2 間 (3.0 m) の建物で、SB1814 より新しい。SB1822 も 2 間 (2.4 m) × 2 間 (3.0 m) の東西棟であ

るが西妻柱と北側柱 2 本分の柱穴を欠く。SA1789 は 2 間 (3.6 m) の南北柵で柱間 1.8 m 等間である。建物の西妻となる可能性もある。SA1813 も 2 間 (3.5 m) の南北柵である。

II 類は北で東に $1^{\circ}20'$ 振れるもので SB1797・1800・1801 がある。SB1797 は南半が調査区域外におよぶため規模は不明であるが、3 間 (6.8 m) 分を検出した。柱間はそれぞれ 2.4・2.4・2.1 m である。SB1801 は桁行 2 間 (3.2 m), 梁行 1 間 (2.7 m) の南北棟で東側柱列を SB1797 の東側柱列とそろえている。SB1800 は 2 間 (4.0 m) \times 2 間 (4.4 m) の東西棟である。SB1737 は北地区北端で検出した桁行 3 間 (6.3 m), 梁行 2 間 (4.2 m) の東西棟である。II 類と同様の建物方位を持っている。

III 類は北で西に $2^{\circ}30'$ 振れる建物方位をもつものである。SB1795 は 3 間 (3.6 m) \times 3 間 (4.5 m) の東西棟で、柱間は桁行が 1.5 m, 梁行が 1.2 m の等間である。SB1802 は 3 間 (5.1 m) \times 2 間 (3.2 m) の東西棟で桁行柱間 1.7 m 等間、梁行柱間 1.6 m 等間である。SB1810 は 3 間 (4.2 m) \times 3 間 (3.6 m) の南北棟である。

IV 類は北で東に $5^{\circ}30'$ 振れるもので、III 類と同様に柱間寸法が整い、さらに比較的大きい柱穴をもつという共通の特徴を有する。SB1790 は 3 間 (4.5 m) \times 3 間 (3.6 m) の南北棟で桁行柱間 1.5 m 等間、梁行柱間 1.2 m 等間である。

SB1796 は梁行 2 間 (3.6 m) の南北棟で、桁行は 2 間分 (3.6 m) を検出した。柱間は桁行梁行共に 1.8 m 等間である。SB1819 は 2 間 (4.8 m) \times 2 間 (3.0 m) の南北棟で、柱間は桁行 2.4 m 等間、梁行 1.5 m 等間である。SA1829 は 3 間 (4.5 m) の東西柵で、さらに西に続く可能性がある。柱間は 1.5 m 等間で、東から 2 本目の柱穴が SF1832 の西側溝にこわされており、条坊施行以前の遺構とみられる。SB1755 は北地区で検出した、桁行 3 間 (5.4 m) の東西棟の一部である。柱間は 1.8 m 等間。

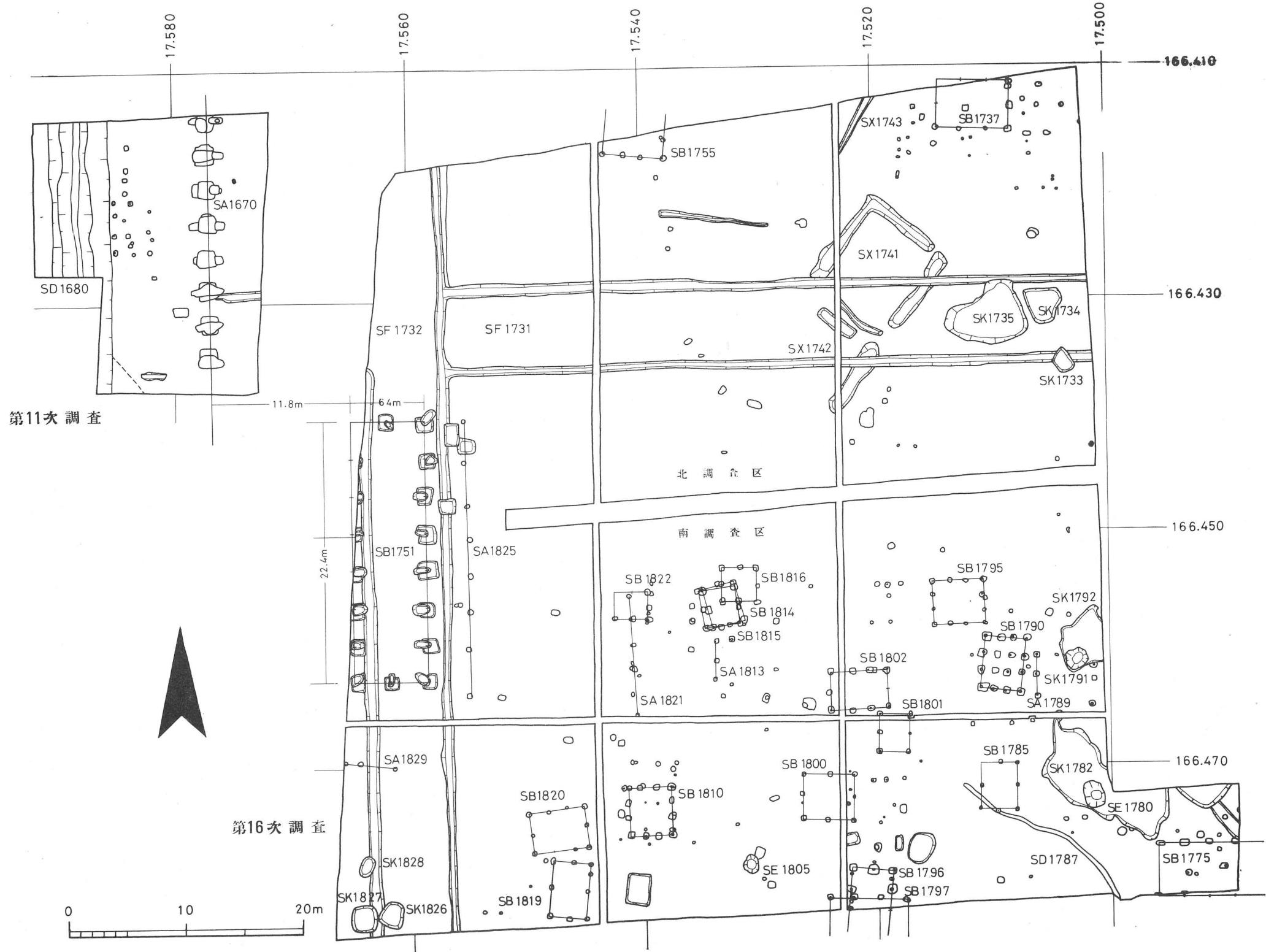
V 類は北で西へ $7^{\circ} \sim 15^{\circ}$ 振れるもので、SB1820・1814・1815・SA1821 がある。SB1820 は桁行 3 間 (4.8 m), 梁行 2 間 (3.6 m) の東西棟である。SB1814 は 2 間 (3.6 m) \times 2 間 (2.8 m) の南北棟で、SB1816 の柱穴と重複し、SB1816 よ

り古い建物である。SB1815は2間(3.2m)×2間(3.1m)の南北棟でSB1814の柱穴にはほぼ全体が重なって検出され、SB1814の建て替えとみられる。SA1821はSB1822と重複しそれより古い南北柵である。5間分(10.3m)検出した。

以上の如く、建物の方向性を基準として分類すれば五つのグループに分けることが可能である。但し、この分類がそのまま時期の差に結び付くか否かについては、なお詳細な検討を要するが、これらの分類の中で柱筋を揃えた建物配置を認識できるものがあり、また、柱穴の大きさや柱間のあり方に共通した特徴が認められるなど、それぞれ時期差を反映した一群として把握することも可能である。もし一群と考え得るならば、重複関係からはV類がI類より古い事、IV類が条坊より古い事がいえる。また、第5～9次調査の成果を参考にすれば、建物方位が条坊の方位と著しく異なるIV・V類については、条坊施工後に建てられたものとは考え難い。さらに、V類の建物であるSB1819の柱穴からは、建物廃棄時に一括投棄された状況で、7世紀後半の土師器が出土しており、この建物が条坊施工時に廃棄された可能性を示している。つまり、条坊施工時、またはそれ以降に建設された可能性を残すものはI・II・III類の比較的方眼に近いグループ(N2°30'W～N1°20'Eを含む)であると言えよう。しかし、これら相互の先後関係についてはさらに慎重な検討を要するであろう。

上述した小規模な掘立柱建物に関係する遺構に井戸2基がある。SE1780は、藤原宮廃絶後の土壙SK1782の下層で検出したもので、直径1.2m深さ1.5mの素掘りの井戸である。埋土から7世紀後半の土器類が出土したが、壺皿類が少なく、土師器甕Aの体部が多い特徴がある。SE1805も素掘りの井戸である。直径0.6m深さ0.6mで遺物もSE1780と近似している。共に藤原宮の造営にあたって廃棄されたものであろう。

藤原宮以前の遺構には、他に、SK1791がある。これはSK1792の下層で検出した直径2m深さ0.2mの不整円形の土壙で、埋土に繩文式土器とサヌカイトの剝片を多量に含んでいた。また調査区の各所から繩文・弥生時代の遺物が出土しており、付近にその時代の遺構の存在する可能性があろう。なお、調査



第16次調査遺構実測図

区の東南に蛇行する溝 SD1787 があるが、その性格は不明である。

藤原宮以後の遺構には、図示していないが調査地全域を東西・南北に走る多数の細溝がある。細溝は耕作に関係するものとみられるが、調査地西半に藤原宮の瓦を多く含むもの、東半に土器を多く含むものがあり、瓦器を含む溝を含めて掘られた時期に小異があるものと思われる。調査区の西南隅にある 3 つの土壙 SK1826・1827・1818 はいずれも直径約 2 m 深さ約 0.4 m の不整円形の土壙で、中に 15~30 cm 大の花崗岩が多数入っており、中世以降の土壙墓である可能性がある。

類	遺構	柱間数	総長 (m)		建物方位	備考
			東西	南北		
I 類	SB1775 東西棟	1×3 以上	6.3 以上	4.6	0°00'	
	SB1785 南北棟	2×2	3.0	4.0	〃	
	SB1816	2×2	3.0	3.0	〃	
	SB1822 東西棟	2×2	3.0	2.4	〃	
	SA1789 南北柵	2		3.6	〃	
	SA1813 南北柵	2		3.5	〃	
II 類	SB1737 東西棟	3×2	6.3	4.2	N 1°20' E	北調査区
	SB1797 東西棟	?×3	6.8	?	〃	SB1801 と東側柱をそろえる
	SB1800 東西棟	2×2	4.4	4.0	〃	
	SB1801 南北棟	2×1	2.7	3.2	〃	
III 類	SB1795 東西棟	3×3	4.5	3.6	N 2°30' W	
	SB1802 東西棟	3×2	5.1	3.2	〃	
	SB1810 南北棟	3×3	3.6	4.2	〃	
IV 類	SB1755 東西棟	?×3	5.4	?	N 5°30' E	北調査区
	SB1790 南北棟	3×3	3.6	4.5	〃	
	SB1796 南北棟	2 以上×2	3.6	3.6 以上	〃	
	SB1819 南北棟	2×2	3.0	4.8	〃	
	SA1829 東西柵	3	4.5		〃	SF1832 より古い
V 類	SB1820 東西棟	2×3	4.8	3.6	N 7°40' W	
	SA1821 南北柵	5		1.0.3	〃	SB1822 より古い
	SB1814 南北棟	2×2	2.8	3.6	N 15°10' W	SB1816 より古い
	SB1815 南北棟	2×2	3.1	3.2	N 8°50' W	SB1814 の建替え

第16次調査 A 期建物一覧表